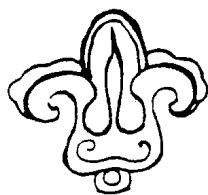


唐宋の文学

松本

松本 肇

唐宋の文学



創文社刊

〔まつもと・はじめ〕1946年，福島県生まれ。
東京教育大学大学院博士課程単位取得退学。
函館大学講師を経て，現在，筑波大学文芸・
言語学系教授。
〔主要論著〕『柳宗元研究』（創文社），『中唐
文学の視角』（共編，創文社），「李賀の詩を
めぐる宇宙論的考察」（『中国文学のコスモロ
ジー』東方書店）ほか。



中国学芸叢書

(10)

〔唐宋の文学〕

二〇〇〇年九月二五日
二〇〇〇年九月三〇日
第一刷印刷
第一刷発行

著 者 松 本 肇

発 行 者 久 保 井 浩 俊

発 行 所 株式会社 創 文 社

〒101-0063 東京都千代田区麹町二一六七
03-3213-7701

ISBN4-423-19417-1
Printed in Japan

精興社印刷
鈴木製本所

まえがき

本書は、唐宋の文学について論じたものである。ただし、一般の文学史の書物に見られるような記述の方法をとっていないので、はじめに全体の構成について触れておく。第一章は、本書の序にあたる。そこでは、事実よりも文学的真実を重んじるという私の基本的な執筆態度を表明している。第一章を読むことによって、本書の大体の性格を把握することができるだろう。第二章は、文学者の逸話を中心に、文学の危険な魅力について述べた。荒唐無稽なものも採用し、逸話自体をひとつの文学論の枠組みでとらえてみた。第三章は、中唐から宋への展開を軸にして、快楽という視点から文学を論じた。

私は本書で、文学自体に内在する自立的な原理の追求をめざした。それが文学研究の使命だと思うからである。

目次

まえがき

第一章 詩と真実

第一節 華山遭難

五

第二節 半夜鐘

四

第二章 文学の魔力

第一節 栄光と受難——文学作品の効用

三

一 栄光

三

二 受難

三

第二節 文学創作の説話

三

一 夢と詩才

三

二	作詩の指導	五
三	推 敲	六
第三節	詩 識——ことばの魔力	七
一	六朝時代の詩識	七
二	唐代の詩識	八
三	宋代の詩識	九
四	詩識をめぐる議論	九
第四節	作家と作品	一〇
第五節	恐ろしい文学	一五
第三章	快樂としての文学	
第一節	古文の修辭学	一九
一	象徴としての登山——「始得西山宴游記」	二〇
二	数字の魔術——「捕蛇者説」	二六

三	愚者の美学——「愚溪詩序」	一四三
四	文体と認識	一四四
第二節	怪奇の文学——韓愈	一四五
一	独創性の追求	一五五
二	暴力と破壊	一五五
三	醜惡の美	一五九
四	唐から宋へ	一六四
第三節	娯楽の文法	一七二
一	暗号	一七三
二	脱出	一七五
三	対決	一八一
四	時の旅	一八三
五	トリック	一八六
六	試練	一八八

第四節 詩学の発見

一 不尽の意 一九七

二 換骨奪胎と点鉄成金 二〇五

三 興 趣 二二一

四 景と情 二二四

五 読みの快楽 二二七

六 知の冒険——王安石の集句について 二二九

第五節 快楽の思想——蘇軾を中心に 二三五

一 快楽の思想 二三五

二 快楽の思想を支えるもの 二三三

三 快楽の思想の源流 二三九

四 もうひとつの桃源郷——相对化への志向 二四三

注 二四七

あとがき 二五七

索引 一六〇

唐宋の文学

第一章 詩と眞実

第一節 華山遭難

中国の陝西省華陰市の南にそびえる華山は、主峰の海拔二〇八三メートル。五岳のひとつで、とりわけ険しい山として知られる。この華山に登ってひどい目にあった男がいる。李淵が唐をおこしてから一五〇年後に生まれた、中唐の韓愈（七六八―八二四）である。

韓愈は変わった冒険が好きで、人と華山の頂上に登ったことがあった。ところが帰り道が分からなくなり、彼は遺書を記すと狂ったように大声で泣いた。華陰の令があれこれと救出の方法を講じたので、やっと下山できた。

これは唐の李肇^{りちよう}が著わした『国史補』巻中に載せる話である。事実かどうかはひとまず措くことにしよう。韓愈が華山に登って降りられなくなったという、この短い記事が後世の議論を呼ぶことになる。そこには、各時代の人々の認識のあり方が反映されていて、まことに興味深い。まず、李肇への反論ののろしを挙げたのが、五代の沈顔^{しんがん}である。『荅^{ちようけい}溪^い漁^{いん}隱^{せん}叢^{そう}話^わ』後集巻十に引く、沈顔の「登華旨」という文章を見てみよう。『歴代確論』からの引用とある。

あるとき、李肇の『国史補』を読むとこんな記事があった。

「韓文公（韓愈）は華山の頂上に登り、振り向いて見るとあまりにも険しいので、恐怖に駆られて下山の仕方が分からなくなった。そこで、狂ったように大声を上げて泣き、縄に取りすがろうとし、別れのしるしに遺書をしたためた。とにかく変わったことを好むと、こんな失敗が起きるという教訓になろう」

沈子^{しんし}の意見。ああ、これは文公の気持ちをまったく理解していない。そもそも仲尼（孔子）は、聖人の世でないのに麒麟が出現したことを悲しんだが、悲しみの原因は麒麟それ自体にあるのではない。墨翟^{ぼくてき}は絹糸がどんな色にも染まることを見て泣いたが、彼が泣いた原因は絹糸それ自体にはない。さらに阮籍は車で道路を飛ばし、行き止まりになると大声で泣いたが、はじめから何処へも行けないと考えたわけではないだろう。たぶんものごとに仮託して時代を諷刺したのであり、彼らの意志をこのようなかたちで伝えただけなのだ。過去の賢者も後世の賢者も、それぞれ遠い道にいてのではない。文公が憤慨したのは、地位や名譽を貪欲に追求するのは、高い崖に登るようなもので、険しいけれども歯止めがきかず、身体に危険が迫りつまづき倒れる事態になってから、休息する場所のないことを嘆いてももう間に合わない、ということにほかならない。悲しいことだ。文公の気持ちは、沈子がいなければほとんど闇に隠れたままだったのではなからうか。

『国史補』の内容に若干の相違が見られるのは、伝承がすでにひとり歩きを始めていたことを示している。ここには三つの故事が用いられている。孔子の話は、『春秋』哀公十四年の記事に「春、西のかた狩りして麟を獲たり」とあるのに基づく。また、『春秋公羊伝』哀公十四年には「西のかた狩りして麟を獲たり。孔子曰く、吾が道窮すと」とある。麒麟は聖人の世に現われるめでたい動物なのに、立派な君主がいなかった時代に現われたのを孔子は嘆いたのだった。墨翟の話は、『淮南子』卷十七・説林訓に基づく。墨子は白い絹糸を見て泣いた。それは黄色にも黒色にも染められるという理由からだ。人は習慣によって善人にも悪人にもなるたとえに用いる。阮籍の話は、『晋書』卷四十九の阮籍伝に見える。魏晉の政権交代期に生きて、身の安全を図るためにいつも酒を飲んで酩酊した阮籍の屈折した心情を象徴するエピソードと言えるだろう。

李肇の『国史補』が、韓愈の華山登頂を無謀な冒険と見たのに対し、沈顔は韓愈の登山をひとつの比喩にとらえ、名誉や地位をむさぼる者を諷刺した話と読むのである。その根拠に三つの故事を取り上げたのだった。そして、沈子つまり沈顔こそが韓愈の真意を発掘したと自画自賛する。ここで、沈顔の反論を牽強附会と笑うのはやさしい。だが、その理由を考えてみる必要があるだろう。おそらく、韓愈は敬虔な儒教の思想家という固定観念が沈顔にあり、華山に登って「発狂慟哭」したなどという記述は韓愈のイメージを裏切るものと見たものではなからうか。そのために、諷刺という視点から韓愈の行為を正当化し、儒教の思想家としての枠組みに収まるような弁護を試みたの

である。それは韓愈二儒教の思想家という共通の認識が存在してはじめて成り立つ反論にほかならず、沈顔の時代、つまり五代における韓愈評価を裏側から照らし出したものとも言える。

沈顔の反論への反論が、宋代になって起こった。例えば、魏泰の『臨漢隱居詩話』を見ると、李肇の『国史補』を引いた後で、次のように述べている。

沈顔は『聲書』を著して、李肇の記事はでたらめで、賢者がこのような生命軽視の行動を取るはずがないと考えた。私が退之（愈の字）の「答張徹詩」を読むと、

洛邑得休告 洛邑に休告を得て

華山窮絶陁 華山に絶陁を窮む

倚巖睨海浪 巖に倚りて海浪を睨み

引袖扨天星 袖を引きて天星を扨う（以下、四句の省略あり）

磴磴遶拳跼 磴磴 遶らかにして拳跼し

梯颿颿伶俦 梯颿 颿ぎて伶俦たり

悔狂已咋指 狂を悔いて已に指を咋み

垂誠仍鐫銘 誠を垂れて仍お銘を鐫る

と書いてある。そうしてみると、李肇の記事は事実であり、沈顔の弁護がでたらめだったことが分かる。

韓愈の「答張徹詩」(『昌黎先生集』卷二)⁽¹⁾は、門弟の張徹に与えた詩。自己自身の経歴に触れながら、休暇で洛陽に帰ったとき、華山の山頂に登り、苔で滑ったり縄のはしごが風で揺れたりしたの危険に遭遇した体験を記し、狂気の行動に対する後悔の念を表白している。魏泰は韓愈の「答張徹詩」の一節を根拠に、李肇の記事が事実に基づくものと判断したのだった。ちなみに、『磬書』は沈顔の著作で、その中に「登華旨」という文章が含まれているのだろう。なお、魏泰は『東軒筆錄』巻十五でも同じ論旨の反論を試みている。宋の邵博の『邵氏聞見後録』巻十七も、同じ根拠から『国史補』が正しいと見なす。

宋人の反論がいくらも韓愈の詩を根拠としていることは、おそらく偶然の一致ではあるまい。そこには、合理精神を重んじる宋人の認識のあり方が反映されているだろう。彼らは沈顔のように、韓愈を敬虔な儒教の思想家と見る先入観から自由だった。あくまでも実証的な方法に基づいて、事実かどうかを判定しようとしたのである。魏泰や邵博による韓愈評価の逆転は、宋代の合理精神と切り離して考えることはできない。

それでは、宋代になって『国史補』への反論がまったくなくなったのだろうか。そうではない。『苕溪漁隱叢話』後集巻十に引く、宋の敵有翼の『芸苑雌黄』によると、宋の謝無逸(逸の字)が「読李肇国史補」を書いて、『国史補』の誤りを指摘している。その謝逸の論を、敵有翼が韓愈の「答張徹詩」を引いて否定する。なお、『国史補』を批判するのに、謝逸が韓愈の「上張僕射第二